【彙報】（平成十八年四月～平成十九年三月）

◎平成十七年度埼玉大学国語教育学会大会　総会
○平成十八年十二月二日（土）　於埼玉大学

◇研究発表
◇研究発表
一「大元神楽の研究―蛇綱を中心として―」
小林　雅（埼玉大学大学院２年生）
二「論語における孔子の天命観」
全　英（埼玉大学大学院２年生）
三「国語教材としてのごんぎつねの価値について」
山岸　俊介（埼玉大学大学院２年生）
四「詩をどうとらえるか」
山本　賢一（埼玉大学大学院２年生）
五「確かな言語能力の向上をめざした指導の研究
―論理的文章の指導事項・指導過程の明確化―」
小川智勢子（埼玉大学大学院２年生・三郷市立吹上小学校教諭）

◇シンポジウム
テーマ：文学と教育をめぐって
―〈研究〉という視座から―
シンポジスト：田中　実（都留文科大学）
鶴田　清司（都留文科大学）
戸田　功（埼玉大学）
司会……山本　良（埼玉大学）

◇総会

◎平成十八年度例会
○平成十九年二月十七日（土）　於埼玉大学

◇卒業研究発表
一　音読的聞き方―音読耳を育成する―
青木　栄一（埼玉大学４年生）
二　川端康成『伊豆の踊子』『雪国』論
―反転する『読み』―
佐藤　治郎（埼玉大学４年生）
三　日当山侏儒の研究
下出水華子（埼玉大学４年生）

◇長期研修生研究発表
一　ＰＩＳＡ型読解力を高める
レポートの指導方法
宮岡　章好（所沢市立松井小学校教諭）
二　中高一貫教育における
国語科カリキュラムの開発
津田　顕吾
（さいたま市立浦和高等学校教諭）

◇修士論文発表
一　神事芸能にみる日本の〈カミ〉観念
―西本土の神楽を中心に―
小林　雅（埼玉大学大学院２年生）
二『論語』における孔子の天命観
全　英（埼玉大学大学院２年生）
三『ごんぎつね』を中心とした文学教育研究
山岸　俊介（埼玉大学大学院２年生）
四　詩は何を教えられるか
山本　賢一（埼玉大学大学院２年生）
五　確かな言語能力の向上をめざした指導の研究
―論理的文章の指導事項・指導過程の明確化―
実践検証を中心に
小川智勢子（埼玉大学大学院２年生・三郷市立吹上小学校教諭）

◎平成十七年度修士論文　卒業論文題目
○修士論文題目
平成十八年度修了生（平成十九年三月修了）
確かな言語能力の向上をめざした指導の研究
―論理的文章の指導事項・指導過程の明確化―
実践検証を中心に
小川智勢子
神事芸能にみる日本の〈カミ〉観念
―西本土の神楽を中心に―
小林　雅
『論語』における孔子の天命観
全　英
『ごんぎつね』を中心とした文学教育研究
山岸　俊介
詩は何を教えられるか
山本　賢一

○卒業論文題目

天の香具山の表現性　上野　香織
吉野弘詩の表現特性
～繰り返しを中心にして～　篠原　景子
現代が必要とする国語教科書の姿
音読的聞き方　―音読耳を育成する―　平田　由布
森鷗外研究　―歴史的小説について―　青木　栄一
村上龍論　―『共生虫』にみる村上流―　金成有希子
ザシキワラシ論　遠藤　智
『松本大洋に学ぶ』　大場真奈美
宮沢賢治研究　加賀　孝征
風物から見る『万葉集』　金野　隆光
「マンガに見る教育」　川端　清貴
「貝原益軒『養生訓』にみる中国養生思想」　木内　裕和
読書志向を多様化させるための
教師の働きかけについて　菊池　愛美
認知領域に働きかける語彙指導の構想
―表現マップ法の補完的用法について―　栗城　智枝
手塚治虫論　黒川　和恵

武者小路実篤研究　桑島　敦
夏目漱石「前期三部作」を読む　河野　愛
樋口一葉とジェンダー　近藤　光世
寺山修司詩歌研究　酒井　優
ミヒャエル・エンデ　佐瀬　正伸
川端康成『伊豆の踊子』『雪国』論
―反転する「読み」―　佐藤　治郎
中国古代の刑罰観について　佐藤　文美
日当山侏儒の研究　下出水華子
山梨県富士吉田市の方言　曽根　郁美
『晩年』論
―太宰治の「真実」としての「生」と「死」　其田　充司
『坂の上の雲』研究　高橋　典子
国語科における教科横断的能力の育成について
～ＰＩＳＡ型「読解力」に着目して～　多田　藍
日本語ブームの真相　田中　啓
富士講考　～発展のメカニズム～　谷平　祐介
手塚治虫論　辻　あゆみ

表現力をつける国語教育　富樫優里子
ミュージカルを題材として授業計画　中澤　知秋
教室における児童の発言をどう生かすか
―お互いの発言を生かすためのルールの共有化　中村　絵美
李娃伝の研究
―李娃伝に描かれる女性観―　中村　智美
ドラえもん研究　成岡　香子
「平安時代の文学作品に見る手紙と心の考察」　馬場　朋子
鴻巣のコウノトリ伝説考　藤井　修司
「アーノルド・ローベル研究」
―『おてがみ』を基に―　藤井　渉
青年期女子を中心に多用される省略語について　藤原　祐介
女（女咼）神話　―中国神話の研究　馬籠　香
あさのあつこ『バッテリー』論　馬島　朋子
上代における色彩感覚　松岡　睦美
ディズニー映画と原作の比較　宮家　愛美
芥川龍之介の生涯　森川　隆志
生活に活かせる国語の学習について　柳橋　広子

富山県の方言
―尊敬の助動詞「～レル・ラレル」を中心に―　保田みゆき

不使用状況に耐える漢字学習の在り方　山崎　沙織

万葉集における七夕歌の表現　横山　卓司

阮籍の「詠懐詩」について　脇田　治

『現代小説中の記号の使用について』
～「?」とその周辺～　和田　宣子

◎埼玉大学国語教育学会研究奨励賞受賞論文の紹介と講評

平成十一年度より、研究・教育の活性化のため、学生会員の作成した卒業論文の中から特に優秀と認められたものを表彰しています。第八回にあたる平成十八年度は、七点の論文に研究奨励賞（賞状と副賞）が贈られました。

以下は、受賞した論文の紹介と講評です。

「音読的聞き方―音読耳を育成する―」　青木　栄一

群読や朗読等の音読指導において、児童生徒に読み方の工夫について考えさせたり話し合わせたりすることは多い。けれども、そのために必要な先行経験が十分に与えられていることは少ないようである。本研究は、奥野庄太郎の提唱した「聴き方教授」を再評価したうえで、それに基づいた読み方指導の具体策を構想したものである。さらに、様々な読み方の具体例を聴かせることで児童生徒が読み方の工夫ができるよう、いくつかの代表的な教科書教材について、さまざまな読み方の実例を対比的に並べ、読み方によっていかに印象が違うか、又、違う世界として表現することになるのかを、面白く聴きながら身につけられるように工夫した録音教材を作成、添付したものである。先行研究をふまえつつ、ユニークな提案を実例を使って実証しようとしており、その創見性が高く評価された。

（文責　戸田　功）

「樋口一葉とジェンダー
―『たけくらべ』『にごりえ』論―」　近藤　光世

樋口一葉の「たけくらべ」「にごりえ」をジェンダー・スタディーズの視点、方法論から考察した好論文である。一葉の生涯や同時代の社会状況といったコンテクストを歴史的に調査・分析するのみならず、同時にテクストの丹念な分析を積み上げて、その上に自身の問題意識を位置づけている。

「たけくらべ」論においては、美登利の変貌の原因は何かという論争を、同じく「にごりえ」論においては心中事件の真相は何かという従来の論争を再検討し、さらに「頭痛」「持病」等の表現が女たちの一面を照らし出す表現であるとして、「にごりえ」の「お力」は覚醒した「美登利」であるという視点を打ち出す等、真摯な考察を示した。

（文責　山本　良）

「川端康成『伊豆の踊子』『雪国』論
―反転する『読み』―」　佐藤　治郎

本論文は川端康成の代表作二作を取り上げ、それを「旅」という共通のコードによって読み解くことによって、主人公「私」のカタルシスや「非現実の美」の発見といった従来の枠組みを再検討した好論文である。『伊豆の踊子』論において、「私」の「孤児根性」からの脱却は踊子との真の出会いによって果たされたのではなく、あくまでも「私」の空想の内部においてであり、また『雪国』の「島村」はおのれが固執する「非現実の美」によって最終的には否定され、それと反転するかたちで女たちの生が生々しく浮かび上がる構造となっているといった結論と、それを導く丹念な考察が高く評価される。

（文責　山本　良）

「中国古代の刑罰観について」　佐藤　文美

本論文は、中国古代社会において「刑罰」というものが、どういう性格のものであったのかの解明を、当時の漢文文献の検討と先行研究の解読を通して試みたものである。

具体的に言えば、先ず前漢の文帝期に行われた「刑法改革」に焦点をあて、それが『漢書刑法志』をはじめとする漢代の文献にはどのように描かれており、当時の人々にどのように評価されたかを確認する。そして「改革」という制度の揺らぎの中からあぶり出されてきた当時の刑法観・刑罰観

を、冨谷至・籾山明という新進気鋭の中国刑法史研究家の研究成果を手引きとしながら解明しようとしている。

最終結論を言えば、中国古代における刑罰とは、犯した罪に対する償い（＝応報刑）ではなく、犯罪が完遂されることを予防する「威嚇刑」の側面があったのではないかとした。また文帝の改革については、肉刑（鼻削ぎ、足斬り等身体を損傷させる刑罰）を廃止することを中心とするものであったわけだが、この改革意味について、当時表明された見解からは、文帝という皇帝の慈悲深さの称揚＝漢王朝の美化を目指したものであったことを指摘する。また先行研究を踏まえての検討を通して、この刑法改革には、秦の制度から脱皮して、漢による新しい制度を創設したいという、漢王朝の独自性の主張・確立と言う、政治思想史的側面があること、及び、肉刑（＝身体の恒久的な変形→人間の異型化）という刑罰が始原から帯びていた属性を払拭して新しい人間的な刑法観を確立しようという、社会史的な側面があったのではないか、としている。

漢文文献の読み込み、難解な研究書の解読という、やっかいな二つの仕事を同時進行で行いながら、稿者なりの見方を提示しようという意思が伺えるものであり、労作であると言える。

（文責　薄井　俊二）

「日当山侏儒の研究」　下出水華子

本研究は、鹿児島県に伝わる民話「日当山侏儒」の生成過程について論じる。日当山侏儒とは徳田太兵衛という実在する地頭のことである。

当民話には実在する地頭が知恵を使って殿様を批判する、という類話にはない要素が存する。この点に関して本論文では、地頭という職に着目する。地頭とは藩内の下級武士を管理・観察する役職で、薩摩藩が独自に設けた中間管理職である。このような独自な中間職があること、及び火山による不作が続く薩摩の過酷な風土と民衆への圧力とが影響して、本民話は成立したと説く。

民話再生産の過程や、民話と風土との影響関係について一つの可能性を提示している。その点に論としての発展性が感じられた。加えて綿密な調査と、明確な論理構成とが評価された。

（文責　飯泉　健司）

「山梨県富士吉田市の方言」　曽根　郁美

本論文は山梨県富士吉田市における方言語彙、文法について論じたものである。調査は若年、中年、老年の各年齢層を対象とし合計十六名を対象として行い、調査項目は当方言に特徴的と思われる語彙（カジル、ボッコ、シミル、ワニワニスルなど）および文法事項（ツラ、ラ、ズラ、チョなど）である。また、男女差や世代差による使用語彙の違いや方言使用意識のあり方などについても議論がおよび、富士吉田市方言に対する総合的な調査報告となっている。なお、本論文は先行研究『山梨県方言の変化に関する社会言語学的研究』（二〇〇一）の報告と比較できるようになっており、貴重である。

（文責　村上　謙）

「ドラえもん研究」　成岡　香子

アニメ（マンガ）と書籍の両方を視野に入れて行った研究である。のび太とドラえもんとの関わりを教育学的に読み解こうとした。のび太の自己成長（発達）にドラえもんがどのように関与しているのだろうかという問題意識である。ジャイアンとスネオ、又、静香という友だち、あるいは、のび太の母という様々な人との関わりの中で、のび太は成長していくのだが、その成長過程においてドラえもんは「支援」という形で、特に心よりも物の面でのび太を激励している。しかし、ドラえもんはエロスを持たず、エロスを発揮し得ないので、のび太が成長するのは静香との関わりにおいてであろうと推測する。この論証過程が見事であった。

（文責　竹長　吉正）

編集後記

『埼玉大学国語教育論叢』第十一号をお届けします。

本号に収録の「シンポジウム」は、昨年の大会（平成十八年十二月二日）で行われたものを掲載したものです。その後にシンポジストと司会者によるシンポジウムを振り返っての事後論文を掲載してありますが、執筆時期に開きがありますので、ここにお知らせいたします。山本先生のものは大会終了直後の十二月に執筆され学会報第二十三号に掲載されたものを転載しました。戸田のものは一年以上経過した一月に書かれています。また、鶴田先生のものは十一月、田中先生のものは十二月です。田中先生のものから内容が公開書簡にもなっておりますので、申し添えました。

また、本号には研究論文二篇のほかに、薄井先生による中国への調査旅行の報告記を載せることができました。会員諸氏には、論文に限らず、これからも活発なご投稿をお願いいたします。（T）